〈実践報告〉

『やま プロジェクト』について

やま プロジェクト:
游重器、陳思懿、劉淳、黄雅芬、吉田藍、蔡杏玟、村上生紗

本大学院は2006年より開設し、研究活動はいくつのプロジェクトを中心にして行われています。『山プロジェクト』は、そのひとつであります。『日本語文学系』が作る大学院のプロジェクトですから、「多言語間交渉、文化調整能力の育成」を考えながら、そとの社会と出会ったり、交流したりしています。そこで日本語や中国語などにまがたるバイリンガル・リテラシーと運用能力が必要だということで、「人間の多元的な交流のために必要だ」と考えるわけです。

『山プロジェクト』はこういったことを踏まえて、山の物事、いわゆる原住民のことをはじめ、戦前日本植民時代のことや戦後国民政府時代のことを研究しています。このプロジェクトの内容は部落のお年寄りの半生記をまとめる、子供の教育活動、教会の壁に絵を描く、部落の地図作り、ある元日本人警察官の家族にまつわる歴史、お出かけツアーなど、いろいろな企画をしています。

どうして『山』なの？　どうして『原住民』なの？　日本語を勉強している大学院とどう関係するの？　とよく聞かれます。『山』には日本植民地時代の歴史と文化がかなり色濃く残っています。時代と共に変化していく中、即急に保存するべき、多くの数奇な物語があります。証言者であるお年寄りの高齢化や、若者の都市への流失により、様々な貴重な『山』の歴史が失われつつあります。国民党政府後更にこの物語は心の奥底に仕舞われ、誰も知らない秘密になっていることが多いのです。私たちはもっと多くの人たちに、これらの物語を知ってもらいたいと思っています。そして、台湾はどういうところなのか、豊富で多彩な側面を見せてくれると思います。

今、台湾の中で台湾意識、台湾アイデンティティの高揚が起こっています。“族群融合”（いわゆる内外省人や客家人、原住民などの群族を越えて融合すること）が盛んに叫ばれています。国民国家を作り上げているもの、それは国家認同感（ナショナリズム）であり、台湾の国際的な地位を得るための一つのエレメントとなっています。しかし、そういった中でも原住民から、自分たちは台湾の本来の住人であるという意味で「原住民」だという名前を自称するようになりました。マジョリティ（“我々”を含む）はその声に耳を向け、再度自分たちの国家を作り上げている国家認同感とは何か、自省的に考える必要があるのではないでしょうか。という思いを抱え、私たちは『山』に向かっています。

プロジェクトのスタッフ

游　重器
役割：2005版学部半生記編集隊長
『山』って魅力があるところだと思い

ます。5年前学部の授業のきっかけとして初めて台湾中心部南投を訪ね始めました。あれから、よく訪ねる事になり、違う人や文化との出会いで元元あった相手への印象が変り、お互いの存在を再認識することができました。そこで、友達ができたり、一緒に遊んだりすることもたくさんありました。『山』だから、衰退だと言いながら、見落とされたり、忘れられたりすることがよくあるけど、僕はそれを変えようと思っています。どうかここの美しい魅力をたくさんの人に知ってもらいたい。

陳　思懿

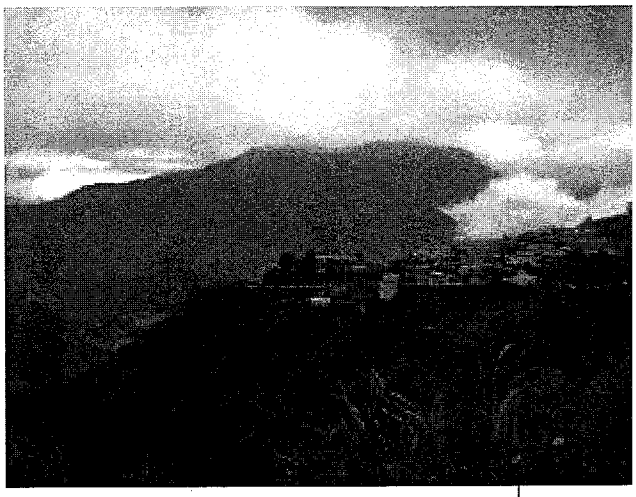
小さい時から、山と原住民との関係がよく近い。しかし、分からないのは、「山」と「原住民」の関係、「私」と「原住民」の関係、「私」とこの「土地」の関係。いろいろな関係の中に、自分が「私」のことをどう位置付けるか、「他人」のことをどう位置付けるか、よく迷ってしまう。このプロジェクトがいいとは言えないが、その中からよく「関係性」を見えるのは一番だと思っている。

劉　淳

大学卒業から二年。大学院に入ってから山にいくようになりました。最初は誘われてみんなについて行ったんですけど、むかしあまり接触していなかった人やものがたりに出会って、とてもいい経験だと思います。やりかたはめちゃくちゃだけど、いろいろな体験ができました。勉強になりました。これからも、頑張りたいと思います。

黄　雅芬

大学院になってからやっと山を訪ねることができた。山には何があるのかもわからないまま、とにかく行ってみようと。山に行ってたくさんの人と出会えてそこで新しい人間関係ができた。教会の牧師、長老などの人と知り合うようになっただけでなく、山に育てられているかわいいらしい子供たちとも面識があるようになった。その人間関係を作ったことによって自分の生活圏も広くなった。それは自分のことしか関心を持っていなく、他人のことに対して冷たい顔をしている癖がある現代人にとって暖かい水を心に注ぐようになるのではないかと思っています。



高地のまち

吉田　藍

役割：できることならなんでもしますよ係

何で『山』に行くの？　っていうことをよく聞かれます。今の所明確な答えは言えません。最初は『山』の暮らしへの興味からでした。メディアから流れる“彼ら”はエキゾチックな存在だったからです。中国語のままならない私は『山』へ行ってもできることがなく、退屈だと思うこともあります。でも、知り合いができるとまた会いたくなります。山の緑や災害を目にすると心が打たれます。そして、色んな人との接触によって「私」という存在について学ばせてもらっています。

蔡　杏玟

私は２年生です。まだ始まったばかりです。みんなと一緒に仕事して、普段自

分の生活の中で出会うことがないような人たちと一緒に活動するとき奇妙な感じがあって、すごく喜びを感じています。人と接触することが、好きな方はどうぞ私と一緒にご参加ください。

村上　生紗

１年生です。山に行って、ある子どもが私の名前を呼んでくれるとき、とてもうれしく思います。また行きます。

活動内容紹介

半生記

担当：アーチ

山のお年寄りに半生記を聞く

『半生記』という企画が始まったのは、2003年学部の「地域研究」クラスでした。このクラスで行った『半生記』とは、『山』を訪ねる学生が、いろいろなお年寄りと話をしたり、昔のことを聞いたりして、記録して物語を書くものです。簡単に言えば、人々のライフストーリーです。最初のスタートは、まず気楽な雰囲気で訪問し交流してから、簡単な物語を書きました。それで、八人のストーリーができました。そして、2004年から南投県にある地域研究をしている先生と結びついて、『水沙漣』という地域名を名付け、『山』の辺りの調査を始めました。その地域とは埔里、霧社、川中島（清流）、日月潭、という四ヶ所が含まれています。全部で九人ほどの半生記が書かれています。今は資料の整理段階であり、出版の形にしようという考えもあります。

人はいつか亡くなります。けれど、少しでもその人の話を聞き、残した言葉は誰かに記憶されます。だから書き残したいと思います。しかしどのように私たちは他人の記憶を残すことができるのでしょうか。「語られた人生」というものを私たちはどう半生記としてまとめ、誰かに届けることができるのか、そういったことを含めて私たちは悩みながら進めています。

子供教育活動

担当：イルカ

子供「教育」って何だろう。私たちは「山」の「子供」を「教育」する資格があるんだろうと．．．．．．。最初にこの子供活動のプロジェクトがどうして行われたのか実はあまりわからなかったかもしれない。でも、「子供」を「教育」する事に関してこの「子供教育活動」企画をやっていくうちに「教育」という課題にものすごく考えさせてもらいました。今でも「教育」の責任は「誰」に負うべきかがわからないので、ついこの「子供活動」のプロジェクトが動かなくなってしまった。が、この間しばらくスヌイに訪ねる機会がもらって、この前知り合った子供たちと再会することになっ

こども活動の様子

た。久しぶりに会った子達はもう十分大人になったとふっと思った。それを見た私がなんだか感動した。子供はだんだん大きくなって、私のことを覚えてないでしょう、きっと。と思ったが、実はそうじゃない。それに、普段私と子供の間に見えてこない「関係」はその再会によってある見えない「線」でつなぐことになった。それに関してものすごく感動した私がいる。私はこれから山プロに参加するメンバーにその感動を覚えたらと期待しています。

教会の壁

担当：藍

2007年春、いつも訪れる南投県仁愛卿のスヌイ長老教会の牧師さんから60周年の記念に、古くなった教会の壁に絵を描いてほしいと頼まれました。壁は大きく、入り口から奥まで１５ｍくらい左右にあります。私たちは、入り口から見て左を「生活の壁」、右を「宗教の壁」とテーマを決め、デザインを考え始めました。しかし、私たちには『山』の知識があまりありません。そこで、この教会に通うお年寄りから、昔はどのような生活をしていたのか、どのような服装をしていたのか、セイダッカ族の伝統的な織物の模様はどういったものなのか、狩りには何を持って行くのか、など詳しく聞きました。実際絵を描く段階で、最初はプロジェクトメンバーや学部生などによる作業でしたが、それを見ていた部落の子供たち、若者やお年寄りが手伝ってくれたり、差し入れをしてくれたりと、次第に共同に作業するようになりました。まず、デコボコの壁を平らにするための塗料を塗り、それから白いペンキ全体的に塗り、その上に映写機によって下書きをし、最後にペンキで色をつけます。なかなか大変な作業で、何とか60周年のイベントに間に合わせようと夜を徹して行ったこともあります。完成した壁の絵は、教会に来る人たちに喜んでもらえたと思います。また、それを見た別の教会の牧師さんから、依頼を受け、現在その教会の壁の絵に取り組むべく準備中です。

地図つくり

担当：ありさ

部落の地図作りをしています。仁愛郷互助村の中原部落というところです。そこは、德克族德固達雅群(SEEDIQ TGDAYA)です。

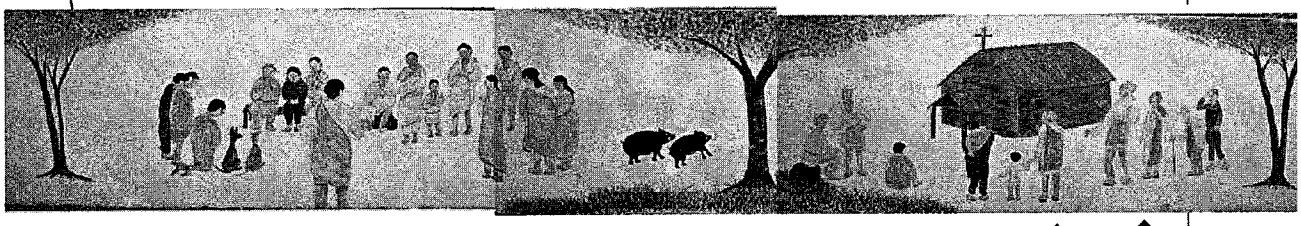
中原の教会の牧師が「この部落にどんな家庭があるのか知りたい」ということで，地図づくりが始まりました。部落を回り，一軒一軒，どのような人たちが住んでいるのかを調査しました。日本の人間環境大学の学生と、地元の青年達と一緒に聞き取りを行いました。どこに住んでいるのか、どんなお仕事をしているのか、何人家族なのか、詳しく話してくれる人もいました。もう少しで完成します。

ある家族の歴史

担当：淳

※写真帳

日本統治時代、理蕃（蕃人）政策の一環として、政略結婚させた日本警察官と原住民の「姫様」（頭目のむすめ）がいます。二人の子孫はいまでも台湾で生活



教会「信仰の壁」

していて、むかし祖先から残った物語や資料を保存しています。山プロは、その家族に訪ねて、物語を聞かせてもらって、むかしの写真も見せてもらいました。とても貴重な資料ですが、何十年も経て、破れてボロボロになってしまった部分もありました。そこで、写真帳修復作業を家族に申し出ました。

写真帳の修復は２００７年後半から、２００８年前半まで、すでに終了しました。デジタル化とデータの処理も完成したが、写真の説明や注釈の整理はまだ作業中です。

※原稿の整理

家族のメンバーのMさんが、祖先（主に父親と祖父、祖母；すなわち政略結婚した二人と息子）の物語を整理して、出版しようという計画があります。上記の写真帳に関わってるし、山プロもまた参加させてもらいました。まずは原稿のデジタル化と校正、疑問が出ればMさんに確認して、お互い討論して、初歩の作業を完成しました。いま出版に迎えて、新たな課題を楽しみにしています。

今後の課題

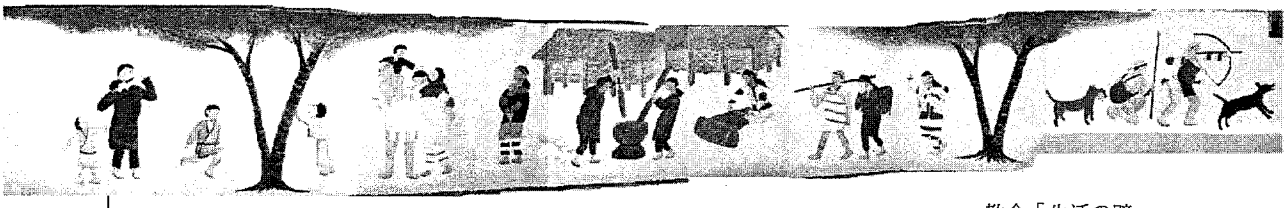
映画企画、中原教会の壁とその他

担当：アスティー

これから、具体的な活動としては台日地区研究の学部の学生たちと一緒に春陽のスヌイ教会にいる年輩者5名の人生物語を聞き取ってそれぞれの物語で映画を五本作成すると言う映画企画と、中原教会の壁絵の作成です。他には途中に追加する企画が出てくるケースも良くあります。

何故このような活動をするか、その意義は何か、そして、山プロジェクトとして今後の課題は何か、と言うなら、このような現地の人と一緒に動き、人の話を聞くことするたびに、如何すればバラバラになっている情報をその関連性を見つけ、整理し、そして物にするのは、活動をしているうちに身につく一種の技術になると思います。山に残されている歴史をわかりやすく、有りのままに整理して忘れられることはなく、あまねく伝わっていくことを期待しています。

今後の課題としては、世代交替のこの時点で我々は如何すれば有効的にこの歴史をもっと深く理解するのかとここ、山プロジェクトで出来たものを如何すれば山の人たちに還元するのか、の問題です。ここで活動する時、コミュニケーションが非常に大事なことですが、山の年輩者たちの使用言語は原住民語と日本語で、私たちは国語、台湾語と日本語です。だから、共通言語は互いにとっても一番得意な言語ではない日本語になっています。年輩者の言うことを正しく理解するとこに対して時々トラプルが起こります。それに、活動する時、必要な技術とアイディアも重要なことです。山プロジェクトのメンバーが如何すれば互いに有益的に刺激するのも一つの課題になると思います。



教会「生活の壁」